

fig.01

東北沿岸部人口の変化
(2010-2017)

	2010	2012	2017	2010→2017	増減率 2010→2017
全国	128,057,352	127,515,133	126,932,772	-1,124,580	-0.9%
岩手県	1,330,147	1,303,351	1,254,807	-75,340	-5.7%
盛岡市	298,348	300,102	295,630	-2,718	-0.9%
宮古市	59,430	57,169	54,847	-4,583	-7.7%
大船渡市	40,737	38,942	36,906	-3,831	-9.4%
久慈市	36,872	36,208	34,544	-2,328	-6.3%
一関市	118,578	125,180	118,319	-259	-0.2%
陸前高田市	23,300	19,707	19,144	-4,156	-17.8%
釜石市	39,574	36,830	35,721	-3,853	-9.7%
大槌町	15,276	12,218	11,453	-3,823	-25.0%
山田町	18,617	16,406	15,350	-3,267	-17.5%
岩泉町	10,804	10,342	9,402	-1,402	-13.0%
田野畑	3,843	3,689	3,378	-465	-12.1%
普代村	3,088	2,985	2,716	-372	-12.0%
野田村	4,632	4,377	4,009	-623	-13.4%
宮城県	2,348,165	2,325,407	2,329,431	-18,734	-0.8%
仙台市	1,045,986	1,060,877	1,086,377	40,391	3.9%
石巻市	160,826	149,042	144,762	-16,064	-10.0%
塩竈市	56,490	55,177	53,399	-3,091	-5.5%
気仙沼市	73,489	67,848	63,197	-10,292	-14.0%
名取市	73,134	72,680	78,082	4,948	6.8%
多賀城市	63,060	61,829	62,147	-913	-1.4%
岩沼市	44,187	43,659	44,697	510	1.2%
東松島市	42,903	40,035	39,590	-3,313	-7.7%
亶理町	34,845	33,169	33,261	-1,584	-4.5%
山元町	16,704	13,781	12,115	-4,589	-27.5%
松島町	15,085	14,858	14,064	-1,021	-6.8%
利府町	33,994	34,884	35,677	1,683	5.0%
女川町	10,051	7,854	6,072	-3,979	-39.6%
南三陸町	17,429	14,870	11,735	-5,694	-32.7%
福島県	2,029,064	1,962,333	1,881,382	-147,682	-7.3%
福島市	292,590	284,055	291,013	-1,577	-0.5%
郡山市	338,712	328,119	334,636	-4,076	-1.2%
いわき市	342,249	330,273	345,667	3,418	1.0%
相馬市	37,817	36,027	38,171	354	0.9%
南相馬市	70,878	65,102	55,364	-15,514	-21.9%
広野町	5,418	5,081	4,083	-1,335	-24.6%
楡葉町	7,700	7,285	-	-	-
富岡町	16,001	14,633	-	-	-
大熊町	11,515	10,973	-	-	-
双葉町	6,932	6,310	-	-	-
浪江町	20,905	19,126	-	-	-
新地町	8,224	7,786	8,278	54	0.7%

出典 | 総務省発表「国勢調査結果」(2005/2010)及び
国勢調査結果確定人口に基づく「人口推計」(2012/2017)による
各年10月1日現在の人口

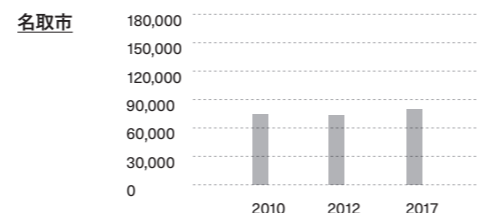
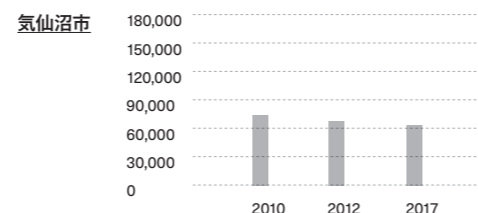
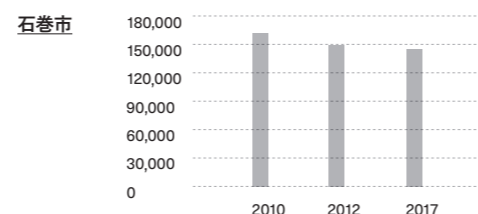
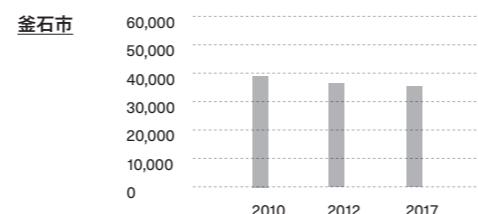
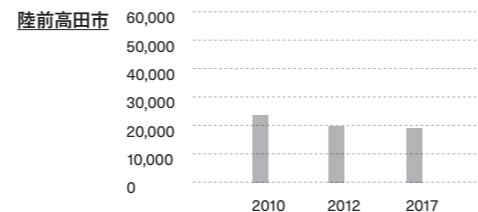
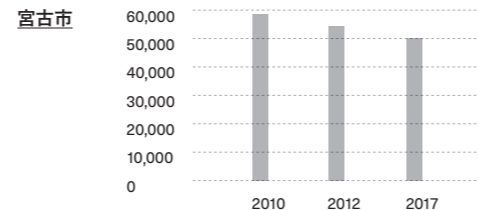


fig.02

岩手・宮城・福島3県
映画館観客数の推移

	2010	2012	2014	2017 (推定値)	2010→2017	増減率 2010→2017
全国計	172,358,000	155,159,000	161,116,000	174,483,000	2,125,000	93%
岩手県	869,732	805,909	849,022	919,461	49,729	98%
宮城県	3,420,667	2,296,134	2,749,881	2,978,025	-442,642	80%
福島県	1,102,729	1,312,490	1,438,657	1,558,015	455,286	130%

fig.03

岩手・宮城・福島3県
種類別にみる
映画館数・スクリーン数の
推移

	人口	スクリーン数(2017)	1スクリーン当たり人口
岩手県	1,254,807	23	54,557
盛岡市	295,630	16	18,477
宮城県	2,322,024	72	32,250
仙台市	1,086,377	26	41,784
福島県	1,881,382	26	72,361
福島市	291,013	13	22,386

	1995 映画館	スクリーン	20005 映画館	スクリーン	2010 映画館	スクリーン	2012 映画館	スクリーン	2017 映画館	スクリーン	2010→2017 映画館	スクリーン
岩手県												
シネコン	0	0	1	7	2	14	2	14	2	14	0	0
ミニシアター/名画座	0	2	0	2	1	3	1	3	1	3	0	0
既存興行館	13	16	9	15	6	10	5	8	4	6	-2	-4
成人映画館	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岩手県合計	14	19	10	24	9	27	8	25	7	23	-2	-4
宮城県												
シネコン	0	0	6	58	9	85	6	56	7	65	-2	-20
ミニシアター/名画座	0	0	1	3	2	4	2	4	2	4	0	0
既存興行館	12	19	4	6	2	4	1	3	1	3	-1	-1
成人映画館	1	2	1	2	1	2	1	1	0	0	-1	-2
宮城県合計	13	21	12	69	14	95	10	64	10	72	-4	-23
福島県												
シネコン	0	0	3	21	4	27	4	26	4	26	0	-1
ミニシアター/名画座	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
既存興行館	18	33	7	13	2	2	1	1	0	0	-2	-2
成人映画館	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0
福島県合計	18	33	12	36	6	29	5	27	4	26	-2	-3

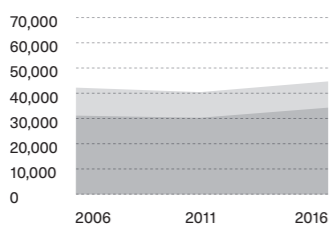
fig.04

岩手・宮城・福島3県の映画鑑賞行動者の推移

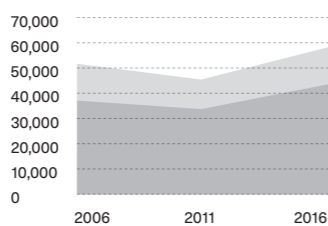
単位：千人

		2006		2011		2016	
		映画館	映画館以外	映画館	映画館以外	映画館	映画館以外
全国	全域	42,341	52,122	39,990	46,153	44,833	59,026
	人口集中地区	31,416	37,717	30,618	34,472	34,386	44,260
	人口集中地区以外	10,925	14,405	9,373	11,682	10,447	14,766
岩手県	全域	314	467	283	405	276	498
	人口集中地区	114	169	128	169	109	185
	人口集中地区以外	200	298	155	236	167	313
宮城県	全域	730	927	711	888	800	1,097
	人口集中地区	446	545	533	667	592	812
	人口集中地区以外	285	383	178	221	208	285
福島県	全域	462	723	418	655	508	792
	人口集中地区	197	309	212	312	270	392
	人口集中地区以外	265	414	206	343	238	400

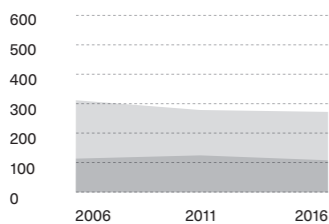
全国・映画館



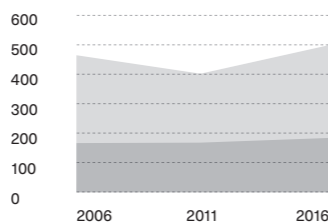
全国・映画館以外



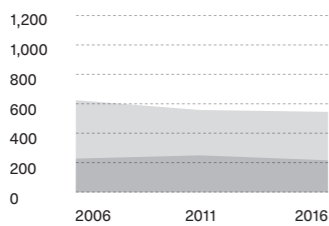
岩手県・映画館



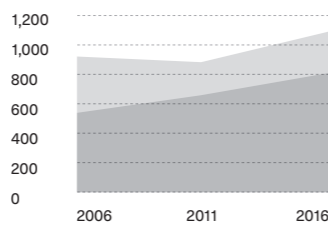
岩手県・映画館以外



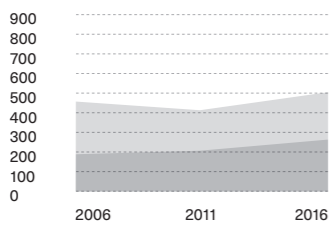
宮城県・映画館



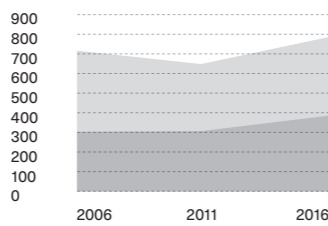
宮城県・映画館以外



福島県・映画館



福島県・映画館以外



平成18(2006)年・23(2011)年・28(2016)年
総務省「社会生活基本調査」
生活行動に関する結果
「生活行動編(地域)：趣味・娯楽」より作成

男女、趣味・娯楽の種類別行動者数、
行動者率及び平均行動日数
全国*、都道府県*、14地域、
10大都市圏・10大都市圏以外、都市階級

映画館

映画鑑賞

(テレビ・ビデオ・DVDなどは除く)

映画館以外での映画鑑賞

DVD・ビデオなどによる映画鑑賞

(テレビからの録画は除く)

人口集中地区以外

人口集中地区

2 | 復興過程における映画の存在

ここまで述べたように、興行/娯楽としての映画は、マクロには、震災の影響から脱しつつあるものの、一方で地域間での人口の偏在、そして、震災以前の上映環境の下げ止まりの延長上にあると言える。そのような前提をもつ復興過程で、映画はどのような存在だったのだろうか。

日常を思い出す縁(よすが)

震災直後の避難所から、仮設住宅の集会所、復旧・新築された文化施設にいたるまで、映画を見ることに人々が求めていたことのひとつは、一時であってかかつての日常をとりもどす縁としての役目ではないだろうか。眼前の風景を失い、それまでの日々を失った私たちにとって、誰もが知っている名作、子どもたちが楽しめるアニメなど、一時でも現実を忘れさせてくれるものを求めたのは無理もないことであった。コミュニティシネマセンターが主導し、各地の協力者とともにすすめた「シネマエール 東北」は、当初から大手配給会社が作品を提供するなどし、それまで映画館から足が遠のいていた人々も含めて「みんなで映画を見る楽しみ」があらためて認識される取り組みであった。

震災後、決して多くはない各地の映画館では、いち早く営業を再開したところもある。宮城県仙台市にあるフォーラム 仙台(と姉妹館であるチネラヴィータ)は、被害が比較的軽かったことも幸いして、震災から10日経ったばかりの3月20日には上映を再開している。その日には筆者も映画館に駆けつけたが、街中の文化施設や商業施設の多くが閉鎖するなか、多くの人が上映を心待ちにするなか、余震時の避難方法の確認とともに「こんなときこそ映画を」と挨拶した支配人の姿が記憶に残っている。

被写体として立ち現れた東北沿岸部

どのような理由であれ、これほどまでに東北が撮られる対象となったことはない。いわゆるドキュメンタリー映画、また、震災を題に撮った劇映画をふくめ現時点で約400作品。多くはドキュメンタリー映画で、多くの人が手軽に高画質の映像を撮れ、それを公開するプラットフォームが普及するなど、映像による記録に関する技術や社会基盤が機を熟しつつあったこと、また、被災地域が広範囲にわたったこともあり、マスコミの手が届かない事物にカメラを向ける作家や、その地域に関わりある人々が多くあった。劇映画においては、『ヒミズ』(園子温監督 | 2012年)や『遺体 明日への十日間』(君塚良一監督 | 2013年)を皮切りに、数年を経てから、被災地での問題を背景とした物語がいくつも描かれている。近年のヒット作である『シン・ゴジラ』や『君の名は。』のように、震災後に日本で制作された映画の多くに、明示されてはいなくともその影響があったと言っても過言ではないだろう。視覚的な記録から人々の物語まで、様々なかたちで沿岸部が被写体となり、これまで東北の人にとって「他者を見るもの = 他人事」であった映画が、否応なく「私たち自身を見るもの = 自分たち事」となった。

映画がつなぐ場とアーカイブの誕生

先に述べたとおり、避難所、あるいは、その後の仮設住宅での生活が長期化するにともない、そこで暮らす人々のために、歌や演奏会など様々な文化的娯楽が提供され、上映会そのひとつとなった。だが、それだけではとどまらない。新たな作品や、過去の映画を通じて現在の被災地を考えようとする映画祭等が各地で組まれている。

福島県出身の映画研究者・三浦哲哉氏が中心となり、福島県のフォーラム 福島ほか東京や金沢で2011年から2015年にかけて13回にわたり行われた『Image.Fukushima』は、“「福島」について、「福島以後」の未来についての知見を交換し、イメージを分かち合う場を作るための映画上映&トークプロジェクト”と銘打って独自のプログラムを展開した。また、関東では、東京を拠点とする非営利メディア・OurPlanetTVが運営するアーカイブプロジェクト「ふくしまのこえ」から特集する『福島映像祭』が、2013年から毎年東京のポレポレ東中野で開催されている。さらに、わわプロジェクト(一般社団法人非営利芸術活動団体コマンドN)が主催しアーツ千代田3331を中心に行っているネットワーク型の『311映画祭』が、2014年から開催されている。また、山形国

際ドキュメンタリー映画祭では『ともにある Cinema with Us』と題した震災関連の特集上映を2011年から行い（筆者は2013年からプログラム・コーディネータを務めている）、2014年からは「311ドキュメンタリーフィルムアーカイブ」も立ち上がった。

また、映画とは異なる地点から立ち上がったものではあるが、市民協働による震災の記録を唱うせんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」は、その記録＝作品を上映・対話する場を継続的に開き続けている。映画に限らず「記録」や「アーカイブ」と称してまとめられた地域の映像を、複数の人々が一所に集い、ひとつのスクリーンで（時には小さなモニター画面で）見つめ、そして、語り合うということが各地で行われてきた。映画館での興行や公共事業としての上映以外に、映画を映すこと／見ることがコミュニティに根付いてきたのである。

3 | 東北沿岸部のこれからの映画文化のために

一人ひとりの心の安らぎから、コミュニティの意識をまとめる鍵にいたるまで、復興過程における映画というものが日常の娯楽以上の役割を果たす場面があったことは事実であろう。また、岩手の例のように、数多く行われた上映活動から、新たな上映の担い手とネットワークが生まれてきていることも重要なことである。その一方で、東北沿岸部で今後、映画文化が持続的に育まれるための視点を書き添えておく。

ひとつには、映画上映への支援である。震災の復興活動に対する助成は様々な分野で行われ、文化芸術への支援、あるいは、文化芸術を用いた地域への支援をねらいとするものがあるが、そのなかで映画上映への支援は極めて少ない。助成対象となる事業の目的や手法に関して「地域づくり」や「交流」「継承」といった言葉はあっても特定の文化芸術が示されていることは少ないが「映画/上映」という手法はほとんど視野に入っていないに等しい。採択結果だけでは十分にうかがい知ることができないが、震災復興の一環であまたの文化芸術事業が行われていたなか、映画上映活動への助成は極めて少なかったと言わざるを得ない。もちろん、芸術文化振興基金等の支援を受けた「シネマエール東北」の活動があり、復興過程での各地の文化的生活の維持やコミュニティづくりで「映画を見る場」が効果をもたらしたことは述べたとおりである。だが、復興支援における文化芸術活動全般でしばしば指摘された「無償という暗黙の前提」のなかで、興行（営利）と文化活動（非営利）の区別が曖昧な映画上映の分野は支援を受けにくいものであったと思われる。

また、様々な場や機会に映画が上映され、そこに従事する人材が各地に立ち上がる一方で、映画館や文化施設での継続的な上映や、映画文化の醸成という観点から必要とされる専門性の問題も挙げておきたい。あるいは、復興期を経由した後の地域社会で、映画文化をどのように醸成するのかという問いそのものとも言えるだろう。コミュニティシネマセンターが取り組む「アートマネジメント・ワークショップイン 東北」やネットワーキングに引き続き期待を寄せるとともに、各地の文化施設や機関の《復興後》の事業において、これだけ自分たち事となった映像表現・映画文化をどのように位置づけ取り組んでいくかを考えるべきと思われる。

映画とそれが映し出されるスクリーンは世界に開かれた窓である。そこでは様々な文化や歴史が行き交うものだが、その窓がこれからも東北沿岸部と世界をつなぎ、風化や孤立を食い止めるだけではなく、新たな文化を育む場となることを願っている。

小川直人(おがわなおと) | せんだいメディアテーク 学芸員

東北大学大学院教育学研究科修了後、せんだいメディアテークで映像分野の学芸員として上映会やワークショップ等を企画、近年はアーカイブを担当。個人でもイベントの制作や本の編集などを行うほか、有志の組織“logue”の一員として企画制作や教育活動に携わる。2011年の東日本大震災後は、プロジェクト FUKUSHIMA! のインターネット配信「DOMMUNE FUKUSHIMA!」に携わり、山形国際ドキュメンタリー映画祭で特集「ともにある——Cinema with Us」のコーディネーターを務める。